

地方  
小出版

情報誌

# アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円
	(本体 136円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター  
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町 20  
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

## 小さな町の本屋と私設図書館が共闘したら

どんなアイデアが飛び出すのか、ワクワクしてる

文／私設図書館「本とカタツムリ」館長 石井一彦



自宅書斎、時々図書館「本とカタツムリ」案内板と入口(右)



身近な町から小さな本屋がどんどん消えている。通勤電車に乗り車内を見渡すと、スマホを見ている人がほとんどだ。

こんな状態で本屋が繁盛するはずがない。

2000年に大規模小売店舗法が廃止されて、郊外に出来たショッピングモールに大型書店が入る。同時期にアマゾンなど本のネット通販が始まり、スマホやタブレット端末の登場を追い風に、電子書籍が普及してゆく。

紙の本を販売する小さな町の本屋にとっては、逆風ばかりの四半世紀だったが、僕自身も電子書籍には関心があり、電子書籍作成ソフトを使ってみたり、断裁機で蔵書を切り刻んで電子化しようと試みた時期もあった。

だから大きな顔は出来ないが、20年近く出版や本屋と関わって、小さな町の本屋と紙の本の価値を再発見した。ひとまず、そのヨタヨタした歩みを振り返ってみたい。

1990年代、建築専門雑誌「群

居」に、栃木県那須高原で行った山小屋自力建設日記を連載したことはあるが、本格的に出版と関わり始めたのは2006年頃のことである。

首都圏では珍しいローカル鉄道流山線が千葉県松戸市の自宅の近所を走っている理由を知りたくなり、当時流山にあった崙書房出版を訪ねたのがはじまりだ。そこで流山市立博物館友の会の中心で活躍していた旅行作家山本鮎太郎(※1)さんを紹介され、すぐに入会してコバンザメのように山本さんの後にへばりついて歩くようになった。松戸や野田も含む東葛地域の歴史や文化を勉強し、毎年1冊崙書房出版から発行される研究誌に寄稿するうちに、山本さんから「そろそろ自著を出してみないか」と、戦前最長のストライキとして名高い野田醤油(現キッコーマン)の労働争議というテーマを与えられた。

昨年話題となった辻野弥生さんの『福田村事件』(※2)と同じく、野田市のタブーと言われた野田醤油労働争議は、地元に残る資料が少なく取材

には苦労したが、戦前の労働運動を研究する港区芝の友愛労働歴史館から協力が得られ、2012年に崙書房出版から『ぼくたちの野田争議』を出版した。

次の著書も崙書房出版から出す予定はあったが、この時僕は、出版の面白さに



石井一彦著『ぼくたちの野田争議 ふるさと文庫203』崙書房発行・2012/06/30 刊・ISBN978-4-8455-0203-5

目覚めてしまい、デザイナーで、建築と江戸文化に詳しい友の会の仲間故中村哲夫さんがDIYで本を作っている姿にあこがれ、急いで自前の出版の準備を始めた。

まずグラフィックデザインを勉強し、特殊なフォントを購入した。次に業務用プリンタと書籍用紙を入手し、前述の断裁機を再利用して2015年、友人が市川市の自宅でカフェを始めた経緯を「懐かしき未来」という小冊子にまとめて、印刷、製本まですべて自分で行き、発行にこぎつけた。

ちょうどその頃、東日本大震災を契機に、山小屋のある那須高原では、社会問題への関心の高いクリエイターが首都圏からUターンやIターンで移住し始める。

従来の富裕層が暮らす避暑地から、カウンターカルチャーの気配が漂うエリアへと変貌する様子が興味深く、地元の仲間も増えて那須に通う機会が急増し、東葛地域の活動から撤退した。

やがて仲間からの紹介があり「懐かしき未来」第2弾は着物の普及活動をする元学校教師の女性に取材して2017年に出版した。

それから彼女を紹介してくれた仲間が下野新聞社と交流があり、出版の経緯が下野新聞に掲載され、ささやかな

ヒット作となった。

さらにその時期、山小屋の近所に新刊本を販売する那須ブックセンター（以下那須BC）が誕生した。僕が「懐かしき未来」を携えて店を訪ねると、店長の谷さんは喜んで店頭で平積みしてくれた。那須BCは、書店と本の文化を拡める会が運営会社で、新たに那須高原に出来た新刊書店として注目を集め、谷店長も栃木県の書店業界ではカリスマ店長として知られていた。

また近隣の有志が支援団体「那須BCを応援する仲間たち」を結成して経営を支えていたので、自然に僕も引きずり込まれ、経営会議に参加するようになった。

これまで自宅のある東葛地域で本屋が消えるのを、座視していた僕にとって、那須BCを応援することが新たな希望になった。

それと同時に電子書籍への関心は徐々に薄れていった。電子書籍では、紙の本と違い端末を用意しないと試し読みすら出来ないし、本屋と違い物理的な空間がないので、そこで時間を潰すことも出来ないから。

谷店長は店内に僕のオススメコーナーを作ってくれたり、新しい小冊子を作る仲間を紹介してくれたり、ますます関係が深まっていたのだが、2021年末に突然閉店してしまう。

那須BCが消えた後、那須高原で何か活動が出来ないか模索したが、体力面、時間面、予算面の限界を感じ、2022年9月、10年ぶりに那須高原から東葛地域に活動の拠点を移した。

東葛地域にいなかった10年の間に、審書房出版は解散していた。

2016年に45周年記念式典が開催され、50周年ではなく、中途半端な45周年だということに嫌な予感を覚えたが、予感的申し2019年に解散したのである。

流山市立博物館友会の会員が数多く著書を出版し、心の拠り所だった審書房出版がなくなり、山本さんは友の会活動の第一線から退いて、10年という歳月の重みを痛感したが、東葛地域の仲間は長い間不義理をしていた僕を温かく迎えてくれた。

そんな旧知の仲間のひとりが、前述の辻野弥生さんと、辻野さんが主催す



自宅書斎、時々図書館「本とカタツムリ」内部へ

る流星の会に入り、会員同士が切磋琢磨する楽しさに目覚めた。

すると、ある日、辻野さんから松戸の常盤平に「生きづらさを感じたら本屋へ」というキャッチフレーズの本屋が、2023年10月に開店したと教えられた。常盤平は自宅から車で20分もあれば行ける町だ。キャッチフレーズに心惹かれ、早速行ってみた。

店主の鈴木祥司さんは労働運動を研究してきた方で、僕が『ぼくたちの野田争議』の著者であることを伝えると、読んだことがあると言う。数百冊しか売れなかった本である。

読者の鈴木さんと出会えたのは、運命のなせる業かもしれないと思った。

田中佳祐『街灯りとしての本屋』（雷鳥社）というタイトルの本がある。

鈴木さんが始めた本屋BREAD & ROSES（以下B&R）の登場は、那須BCが消えて、またしても町の本屋を守れず、意気消沈していた僕の心に希望の灯を灯してくれた。

その一方で、僕は山小屋と自宅に分散していた大量の蔵書を前に、途方に暮れていた。

ある日、青木真兵・海青子『彼岸の図書館』（夕書房）という本を読み、都会暮らしに疲れた若い夫婦が、奈良県東吉野村の古民家に移住して始めた私設図書館ルチャ・リプロを知って、その手があったかと膝を打った。

そして、もっと重要なのが小学生時代に本を借りるために通った東京練馬のムーシカ文庫の記憶だと思う。

児童文学作家の故いぬいとみこさんが始めたその場所は、平凡な幼稚園の

教室に毎週土曜日の午後だけ立ち上がる、不思議な空間だった。

その記憶は鮮烈で50年以上経過した今も僕は、天国にいるいぬいさんの手のひらの上で踊っているような気がする。

普段は自宅の殺風景な書斎が、集まった人の力で、知的な温かい空間に変身するイメージはこうしてまとまり、自宅書斎時々図書館として開放することにした。

ところが、蔵書の多くを山小屋に残して、自宅書斎に入る量に絞ると、公共図書館に比べたらごくわずかな量で、公共図書館で採用されている日本十進分類法に従って分類すると、ジャンルが偏ってしまう。

そこで、日本十進分類法はあきらめた。

では、どうするか。

自分の好みで集めた蔵書だから、心の声を列挙すれば、自然にジャンル分けが出来るとも考えられた。

- ①世界は広いから、必ず自分の居場所が見つかるよ
- ②毎日の食事や暮らしのスタイルについて考える
- ③アートと個人、デザインと社会の関係について学ぼう
- ④ワクワクするビジネス書だってあるよ
- ⑤杉浦日向子に誘われて、江戸の空気を吸いにゆく
- ⑥詳しくないので、大人も読みたい子どもの本を教えてください
- ⑦歴史上の偉人というより、わたしの好きな変な人たち
- ⑧素敵な雑文集って言おうかな。ジャ

ンル分け出来ない本たちを

- ⑨本のある場所、本をつくる人の話は面白い
- ⑩ジャンルは無関係に、東葛飾エリアに関係する本をあつめました
- ⑪たまには難しい本を読んで、考えてみよう
- ⑫自然から学んで、サステナブルな未来を想像してみたい
- ⑬町を使いこなしたり、住むことについて考えるクセがあります
- ⑭定年オヤジ読書計画或いはダイバシティについて
- ⑮「話せばわかる」と限らない。でも「歩けばわかる」と思う
- ⑯モヤモヤしたい今の社会をなんとかしたい方々に

こんな16個の言葉が頭に浮かんだ。

こうして、この4月から、「自宅書斎時々図書館 本とカタツムリ」（以下本カタ）が始まった。

名称は、あじさい寺と呼ばれる本土寺が近いので、最初はあじさいまち図書館がいいと思ったが、あじさいにはカタツムリが似合うことに気がついて現在の名前に決まった。

B & Rの鈴木さんとは、その後、さらに関係が深まっている。

今夏までに鈴木さんが店で始める予定の読書会に本カタとして、全面協力することになった。

まず年会費8円（誤植じゃないよ）を払って本カタの会員になると、会員にはLINEグループに加わってもらい、読書会の案内が届く。参加・不参加は自由で、興味のある人だけ参加する。課題図書に選ばれた本はB & Rで一括購入する。

いちおう図書館だから、会員からのリクエストも受け付ける。購入する価値ありと判断した本はB & Rで購入する。

公共図書館といえば、無料貸本屋などと揶揄(やゆ)され、本屋さんの足を引っ張っていると言われる。

けれども僕は図書館で出会った本を手元に置きたくて、本屋に注文することも多い。

私設図書館でも同じことをやってみたい。

B & Rと本カタが、小さな町の本屋と私設図書館が共闘したら何が起きるのだろう。

共闘はまだ始まったばかり、これからどんなアイデアが飛び出すのか、今

はワクワクしている。

#### ※1「山本鉦太郎」

1929年東京深川生まれ、千葉県流山市在住の旅行作家。全国のまちおこし運動を支援する一方、1978年の流山市立博物館友の会設立に深く関わり、東葛地域の文化運動の中心として活躍した。1986年に誕生し30年以上続いた文章講座では大勢の講座生を育て、研究誌『東葛流山研究』のほか数多くの講座生による著作が発表されている。

#### ※2「福田村事件」

1923年関東大震災直後に、各地で「不逞鮮人」狩りが発生するなか、香川県の薬売行商人が千葉県の福田村で朝鮮人との疑いをかけられ、15名中9名が虐殺された事件。2013年に発表した本は版元の廃業で絶版だったが、関東大震災から100年の2023年に増補改訂版として五月書房新社より復刊、さらに森達也監督により映画化され大きな話題となった。

\*

(いしい かずひこ／私設図書館「本とカタツムリ」館長)

## 新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

### 『奴隷の抒情』 ● 神山睦美 著



本書は主に著者主宰の書評研究会のメンバーの詩や評論作品を通して長年培われた自身の思想を語る評論集であるが、タイトルにも使われている「奴隷」という概念に注意しないといけないと思う。

この言葉は本書でくり返し言及され、この概念を理解することが本書を理解することだと言っていると思うが、これはヘーゲル『精神現象学』における主人と奴隷の「承認」をめぐる闘い、という哲学上の理念に由来している。例えば【第一章 汚名を着せられた言葉 杉本真維子『皆神山』】では、「奴隷となって、どのような自恃からも遠い場所で、黙々と何かをつくっていくということが、世界を変革する根本であることは、どのような時代、どのような状況でも明らかである」と、劣位をあえて受け入れる「奴隷」

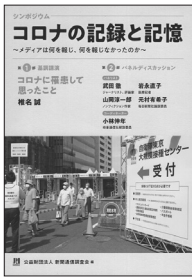
の可能性について言及する。

また【第四章 生と死の循環 岡本勝人『海への巡礼』】では、「ヘーゲルのいう「奴隷」は、その名にふさわしく、「労働者」以上にすべてを奪われた者である。そういうぼろぼろの場所で、途方に暮れているのがこの「奴隷」にほかならない。…そういう無一物の場所こそが人を和解へと導く契機にほかならない…」と奴隷概念の理念性を語る。そして【第九章 詩語の不可能性 田中さとみ『ノトーリアスグリーンピース』 吉田嘉彦『移動式の平野』】の一節は本書における奴隷概念の最も優れた説明になっている。「く勇気を出しなさい、海の底にも道がある」という言葉の何と大いなる響きであることよ。(N)

◆ 1800円・四六判・262頁・澤標・大阪・202404刊・ISBN9784860785864



## 『コロナの記録と記憶—メディアは何を報じ、何を報じなかったのか』 ●ノ瀬英喜 著



コロナは私たちの生活様式に様々な変化をもたらした。その最たるものは、不要不急の掛け声のもとでの自粛行動であろう。新聞通信調査会の調査によれば、これに影響を与えた最大の要因は、「メディアの報道」であった。

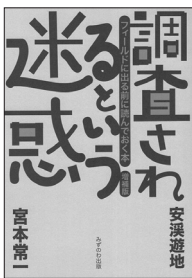
ではこの間、メディアは大量の情報が錯綜し翻弄される社会に十分な役割を果たしたのだろうか。足りなかったものがあるとするれば何であったのか。発信者として自らに問い、整理、検証を試みたシンポジウムの記録である。冒頭、作家の椎名誠が罹患、入院体験を語り、コロナに限らず昨今の戦争報道においても、国民側もどこか面白がって見聞きしているようなところがありはしないかと危惧する。続いて、時事通信社解説委員小林伸年のコーディネイトでパネルディスカッションに入り、ジャーナリスト・評論家武田徹、ノン

フィクション作家山岡淳一郎、医療記者岩永直子、毎日新聞社論説委員元村有希子が、それぞれの報道スタンスをプレゼンテーションする。武田は、メディアは自前の目と耳を持って感染症に向き合うこと、岩永は、行政もメディアも何のために情報を国民と共有するのかというポリシーを整理した上で報道すべき必要性を感じたと述べる。議論は、パニックをおおらない報道の在り方、一例目報道の意味、専門記者をどう育てるか、コロナ報道から得た教訓を論点に行われた。

コロナは終息がみえないまま5類に移行し、報道は激減した。であればこそ、私たちは情報を的確に入手し、見極め、活用する力を持たねばならないと考えさせられる。(飯澤丈夫)

◆500円・A5判・102頁・新聞通信調査会・東京・202403刊・ISBN9784907087401

## 『調査されるという迷惑 増補版—フィールドに出る前に読んでおく本』 ●宮本常一 著



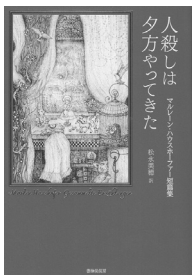
現場に出て相手の話に耳を傾け、観察をするフィールド・ワークは、今や学術研究においてありふれたものとして行われています。しかしそれをされる側ではなく、される側から見るとどう写るのか。本書は民俗学者の宮本常一と、その薫陶を受けた安溪遊地氏によって、フィールド・ワークをされる側の事情がまとめられています。それをひとことで言うとう調査する側は、される側に迷惑をかけることが多いということ。

本書では「調査地被害」という言葉も使われています。例えば調査者の意にそわない回答をすると否定されたり、違う研究者たちが来るたびに何度も同じ内容の話をさせられる、というのは調査される側にとってはいい迷惑ですね。そして研究者が貴重な史料類を借り出したまま返却しないと

なると、もはや単なる迷惑では済まない問題にもなってきます。宮本は「相手を自分の方に向かせようとするこのみに懸命にならないで、相手の立場に立つて物を見、そして考えるべきではないかと思う。」と書いていますがまさにその通りでしょう。残念ながら安溪氏の某島での聞き取りからも、その迷惑の実態が明らかにされています。その他にも調査対象とのかかわり方や、調査地に何をどう還元していくかという問題についても書かれており、実り多きフィールド・ワークのためぜひ参考にしていただきたい書物です。なお今回の増補版では宮本のアフリカ紀行と安溪氏のアフリカでの実践が追加されています。(副隊長)

◆1500円・A5判・150頁・みずのわ出版・山口・202404刊・ISBN9784864260527

## 『人殺しは夕方やってきた—マルレーン・ハウスホーファー短篇集』 ●マルレーン・ハウスホーファー 著/松永美穂 訳



親戚のペビお婆さんは、とつてもすてきな人だ。正義感は筋金入りで、町のちょっとした有名人。わたしは2、3年に1度の割合で小さな町に暮らすお婆さんを訪問した。10年前、最後に訪ねた時、ずいぶん体力が衰え、落ち着きがなくなったように見えたが、夜、わたしが寝ているベッドの端に腰を下ろし、お婆さんは突然口火を切った。「きょうは、わたしが人殺しと知り合ってからちょうど15年目なんだよ」驚いたわたしは、お婆さんに説明を求めるが……。こんな風に表題作は展開していくが、決して血なまぐさい話ではなく、切ない思い出が語られる。

著者は1920年生まれのオーストリアの女性作家。1970年に50歳の誕生日を迎える前に病死。存命中にいくつかの賞を受賞し、オーストリア文学史における重要な女性作家の一人とされるが、

没後はしばらく忘れられていた。しかし、1984年に山の中でたった一人、壮絶なサバイバル闘争を繰り広げる女性を描いた長編『壁』が再版されると再び脚光を浴び、多くのフェミニストや作家に影響を与えた。

本書は少女時代の思い出、大人の生活、戦争の影の3つのテーマで綴られる短編集。友達や動物や家族との思い出、不器用だけれど憎めない大人たち、戦争がもたらす悲劇が凝縮されている。短編小説を書く理由について「自分を喜ばせるため」と答え、長編執筆で少々疲弊しても短編で小さな芸術作品を作り出した満足感を味わえるという。明暗を織り交ぜた世界が読者にも喜びを与えてくれる。(Y)

◆2100円・四六判・223頁・書肆俣尻房・福岡・202404刊・ISBN9784863856219

# 売行良好書

期間：2024年4月15日～5月14日

※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

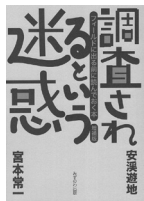
## 【出荷センター扱い】

- (1)『パンクの系譜学』2600円・書肆侃侃房
- (2)『満腹の惑星』2100円・弦書房
- (3)『あかるい花束』1700円・ナナロク社
- (4)『ヤジと公安警察』1100円・寿郎社
- (5)『たまののののちゃん』1100円・蜻文庫
- (6)『韓国映画から見る、激動の韓国近現代史』2200円・書肆侃侃房
- (7)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社
- (8)『「パラサイト 半地下の家族」を見る7つの視線』2200円・クオン
- (9)『住まなくなっても守りたい』2000円・秋田文化出版
- (10)『小さきものの近代2』3000円・弦書房
- (11)『ためされた地方自治』1800円・桂書房
- (12)『わがくアホなる>人生』2500円・石風社



## 【ジュンク堂書店池袋店 地方出版社の本—センター扱い図書】

- (1)『ヤジと公安警察』1100円・寿郎社
- (2)『調査されるという迷惑 増補版』1500円・みずのわ出版
- (3)『われらラジオ異星人』1700円・西日本新聞社
- (4)『シンヌジろうの自分探し』1400円・東奥日報社
- (5)『パンクの系譜学』2600円・書肆侃侃房
- (6)『満腹の惑星』2100円・弦書房
- (7)『新装版 奥武蔵登山詳細図 全130コース』900円・吉備人出版
- (8)『大菩薩連嶺 中央線沿線の山 登山詳細図 全184コース』1400円・吉備人出版
- (9)『たまののののちゃん』1100円・蜻文庫
- (10)『みどりの処方箋』1800円・グリーン情報
- (11)『沖縄苗字のヒミツ 増補改訂』1400円・ボーダーインク
- (12)『新版 奥多摩登山詳細図 東編 全148コース』900円・吉備人出版
- (13)『芸線探訪 26.8キロ芸線跡を歩く 改訂新版』2600円・リーブル出版
- (14)『小さきものの近代2』3000円・弦書房
- (15)『上宮太子と法隆寺』2778円・大元出版
- (16)『明治維新と西郷隆盛』2130円・大元出版



以下ホームページ等でも各種情報提供を行っております。ご利用ください。  
URL : <http://neil.chips.jp/chihosho/> X (旧ツイッター) 公式アカウント : @local\_small

## トピックス — ★★★

▼当アクセス誌新刊ダイジェストで度々新刊書籍の紹介文をご寄稿いただいていた古賀河川図書館の古賀邦雄さんがこの3月に亡くなっていたことがわかりました。享年80歳でした。古賀さんは昭和42年に旧水資源開発公団(現・独立行政法人水資源機構)に入られて以来、30年にわたって日本の河川の治水と利水と環境に係わる仕事に従事され、その間、個人として水、河川、湖沼に関する本をコツコツと収集されてきました。水、川と名の付く本は片端から買い集めたとのことで、古賀さんが当アクセス誌に初めて寄稿された【河川書誌考—里川】というコラムには「東京本社勤務の時は、お茶の水駅で下車して、坂道を下り、神田本屋街の三省堂、古本屋明倫館など、さらに地方・小出版流通センターへ出かけ、全国の河川書を購入してきた」との一節があります。また近年では、当アクセス誌新刊データを毎月つぶさにチェックされ、川や水と名の付く書籍について内容を確認する電話をいただくこともしばしばでした。収集した蔵書をもとに2007年に久留米のご自宅に私設・古賀河川図書館を開館して資料を公開し、2020年にはその蔵書1万3千冊を久留米大学に寄贈、御井図書館内に古賀邦雄河川文庫が開設されました。河川研究と河川文化に寄与された功績に敬意を表すとともに、ここで哀悼の意を表したいと思います。

▼もう一つ訃報です。愛知・三河の歴史書も多く出してきた一人出版社・ブックショップ・マイタウンの舟橋武志さんが4月27日に亡くなりました。享年80歳でした。謹んでお悔やみ申し上げます。「なごや出版情報」(既刊10号)なども出されていて、東海の出版活動の広報にも努力されてきました。舟橋さんには当アクセス誌に2度ほど寄稿いただいたことがあります。一つは2015年4月号【立川和四郎富昌は二人いた!—誤って伝えられている「幕末の甚五郎」】で、もう一つは2021年7月号【戦国史料『影印武功夜話』全21巻完結—原本の公開で研究の深化を】です。どちらも現在弊社HPで公開されています。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

## ジュンク堂書店 淳久堂書店

## 池袋本店

営業時間：午前10時～午後10時

### 池袋であなたのふるさとに帰ってみませんか？

2階「ふるさとの棚」では、地方小出版流通センター扱いのご当地本を幅広く取り揃え、皆様のお越しをお待ちしております。

〒171-0022  
東京都豊島区南池袋 2-15-5  
TEL 03-5956-6111  
<http://www.junkudo.co.jp>

